

## [教育実践研究報告]

## 精神障害者の社会復帰施設実習での学び

高橋 香織 松田 光信 池邊 敏子

## Students' Studies at the Rehabilitation Facilities for People with Mental Disabilities

Kaori Takahashi, Mitsunobu Matsuda, and Toshiko Ikebe

## はじめに

地域基礎看護学実習2（精神看護学実習）は、3年次に領域別実習として位置づけられ、90時間2単位で構成されている。実習目的は、「精神障害によって日常生活や対人関係などに困難を抱えている対象に対して、その人の立場に立って、その人が望むその人らしい生活を追求するとともに、看護の役割課題を検討することができる。対象との関わりの中で生じる自らの気持ちを見つめ、検討し、自分と対象との関係を吟味できる。」である。この目的の達成にあたり、実習場所として、精神科病棟と1日の社会復帰施設で実習を行っている。社会復帰施設では1日を通所者とともに過ごし、体験から学ぶことを重視している。この1日は、2週間の実習のほぼ中間に位置づくように設定している。それは、学生が、入院中の患者が地域で生活するために、病棟の看護として何が必要かを考えることが出来るようにするためである。具体的には、作業所<sup>註1)</sup>（2箇所）、福祉工場<sup>註2)</sup>・地域生活支援センター<sup>註3)</sup>（1箇所）、授産施設<sup>註4)</sup>・地域生活支援センター（1箇所）で実習を行っている。

作業所・授産施設の通所対象者は、作業訓練を必要とする者であり、福祉工場は、一般企業に就労できる程度の作業能力を有しているが、対人関係、健康管理等の理由により、一般企業に就労できないでいる者<sup>1)</sup>である。実習施設によって、対象者の自立度に違いがあることから、学生の学びに差があるのではないかという疑問が生じた。そこで各施設の学生の気づき・学びの実態を明らかにする目的で実習記録の分析を行った。

## 方法

## 1. 分析対象

平成15年度領域別実習の社会復帰施設での実習記録である。78名の学生のうち、76名から同意が得られたため、76名の実習記録を分析対象とした。

実習記録の項目には、実習内容、実習を通して気づいたこと・学んだことがあるが、実習内容は、作業内容やその日のイベント等の記入が多かった。分析には、学びを抽出するための実習を通して気づいたこと・学んだことの内容を分析対象とした。

## 2. 分析方法

分析方法は、質的記述的分析方法を用いた。

同意が得られた実習記録を繰り返し読み、気づきや学びが記述されている内容に対して、内容・語彙の意味を変えないように要約し、1データとした。1データに要約された内容のうち類似するものをまとめてサブカテゴリーとし、さらにカテゴリーへと抽象化していった。

カテゴリー化にあたっては、共同研究者間の合意が得られるまで検討した。

## 3. 倫理的配慮

学生には、研究の目的、個人が特定されないこと、参加の同意が成績に関与しないことを口頭と書面にて説明し、同意書に氏名を記入のうえ、提出を求めた。

## 結果

学びをカテゴリーとしてまとめた結果、記録の内容からA施設は、15のサブカテゴリーから、5つのカテゴリーが、B施設は、22のサブカテゴリーから、6つのカテゴリーが、C施設は、11のサブカテゴリーから、4つのカ

表1 各施設の学び

A 施設		B 施設		C 施設		D 施設		
カテゴリー	サブカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	
通所者の力の気づき	自己決定能力が高い	通所者の力の気づき	自己決定能力が高い	通所者の力の気づき	仕事に意欲を持っている	通所者の力の気づき	自己決定能力が高い	
			問題解決能力がある				対人関係能力が高い	対人関係能力が高い
			対人関係能力が高い					集中力がある
			助け合っていて守ってもらう存在ではない					
		精神障害者の特徴の理解	生活障害を抱えている			精神障害者の特徴の理解	ストレス耐性が低い	
作業所の役割	自己決定、問題解決能力を伸ばす場である	作業所の役割	生活のリズムを作る場である	福祉工場の位置づけと役割	福祉工場の位置づけを知る	授産施設・地域生活支援センターの役割	対人関係を学ぶ場である	
	対人関係を学ぶ場である		仲間の健康な部分をみて目標を持つことができる場である		病気のことも考え対応している		仲間作りの場や居場所である	
	居場所である		対人関係を学ぶ場である				役割を持ち責任感を育成する場である	
	生活リズムを取り戻し友達を作る場である		居場所である				いろいろな作業により能力を見つける場である	
			生活能力を再獲得する場である					
スタッフの援助の姿勢	自主性を尊重する	スタッフの援助の姿勢	自主性を尊重する	スタッフの取り組み	地域への理解を得る取り組みをしている	スタッフの援助の姿勢と悩み	自主性を尊重する	
	生活を支える		健康な部分を伸ばすよう関わる				自己決定能力を伸ばすよう関わる	
	問題を一緒に考える		客観的な判断が必要である				援助に関するスタッフの悩みを知る	
	対等な関係である		共に行動する					
			対等な関係である					
	自己洞察が重要である							
回復過程を理解した援助の気づき	入院中に必要な看護に気づく	回復過程を理解した援助の気づき	入院中に必要な看護に気づく			回復過程を理解した援助の気づき	入院中に必要な看護に気づく	
	回復には段階がある		回復には段階がある				回復には段階がある	
社会復帰に関する現状と課題	偏見がある現状を知る	社会復帰に関する現状と課題	偏見がある現状を知る	社会復帰に関する現状と課題	偏見がある現状を知る	社会復帰に関する現状と課題	精神障害者に対する世間の現状を知る	
	基盤整備が必要である		基盤整備が必要である		基盤整備が必要である			
	他施設・他職種との連携が必要である		支援的な環境が必要である		社会復帰には地域の協力が必要である		地域との交流が必要である	
					病院の診療体制を見直す必要がある			
	社会復帰のための条件を知る		社会復帰のための条件を知る		他施設・他職種との連携が必要である		他施設・他職種との連携が必要である	
			社会復帰のための条件を知る			社会復帰のための条件を知る		

テゴリーが、D施設は、17のサブカテゴリーから、6つのカテゴリーが抽出された。(表1)

なお、「」内はデータを、《》内はサブカテゴリーを、【】内はカテゴリーを表す。B C D施設の学びの記載にあたっては、A施設の学びと重複するサブカテゴリーのデータの記載を紙幅の関係で一部割愛した。

## 1. A施設の学び

### 1) カテゴリー1【通所者の力の気づき】

【通所者の力の気づき】には、《自己決定能力が高い》が含まれる。

《自己決定能力が高い》には、「作業に来るにも、作業をするのも、昼食を買いに行き食べるのも、決められた時間ではなく、自分の好きな時間に行うという自己管理ができているのとそれを任されている」といった自己管理ができているという内容が含まれる。

### 2) カテゴリー2【作業所の役割】

【作業所の役割】には、《自己決定、問題解決能力を伸ばす場である》《対人関係を学ぶ場である》《居場所である》《生活リズムを取り戻し友達を作る場である》が含まれる。

《自己決定, 問題解決能力を伸ばす場である》には, 「自立を支援するのだが, 対象者自身が自立して生きていくために自分には何が必要かを把握しなくてはならない. 対象者が気づきそのためにとらなければならない行動を積極的に行えるように支援する」といった内容を含んでいる. 《対人関係を学ぶ場である》には, 「障害を持つ人々と共に作業を行う中で, 人との関係も生じるため, 社会の中での対人関係も少しずつ学ぶことができる場となる」という作業する場だけではないという内容が含まれる. 《居場所である》には, 「強制されず, 自分を休められる場所にもなっている」という精神的に安心できる場として捉えている. 《生活リズムを取り戻し友達を作る場である》には, 「家で生活する精神障害者にとって外出するきっかけにもなり, 相談できる仲間を作ることができると思った」といった内容が含まれる.

### 3) カテゴリー3【スタッフの援助の姿勢】

【スタッフの援助の姿勢】には, 《自主性を尊重する》《生活を支える》《問題を一緒に考える》《対等な関係である》が含まれる.

《自主性を尊重する》には, 「作業所で, 一番印象に残ったことは, 自主性が大切にされているところである. 作業の量も時間もスピードも拘束されていないため, 自分のペースで行うことができる」という自主性を大切にしたい関わりの内容が含まれる. 《生活を支える》には, 「考え方として一人の生活者を支えていくことを学んだ」が含まれる. 《問題を一緒に考える》には, 「スタッフの方が, 何か問題があっても, それをチャンスと考え, 何が悪いのか原因を(共に)考え対処していくと言っていた」という失敗を良い機会として捉える姿勢を学んでいる. 《対等な関係である》には, 「スタッフの机と作業場に区切りがなかったのを見て, 利用者とスタッフがわけへだてなく接しているということを感じた」というスタッフと通所者の対等な関係を捉えている.

### 4) カテゴリー4【回復過程を理解した援助の気づき】

【回復過程を理解した援助の気づき】には, 《入院中に必要な看護に気づく》《回復には段階がある》が含まれる.

《入院中に必要な看護に気づく》には, 「病棟の精神障害者が, 作業所のような所に通うためには, 自主性, セルフケア, 自己コントロール能力, 対人関係能力が必要

であり, それらを高める看護をしていく必要があると学んだ」という入院中に必要な看護に気づいている. 《回復には段階がある》には, 「病棟実習で関わっている患者さんもメンバーさんのように地域で生活する可能性がある」と実感した」という内容が含まれる.

### 5) カテゴリー5【社会復帰に関する現状と課題】

【社会復帰に関する現状と課題】には, 《偏見がある現状を知る》《基盤整備が必要である》《他施設・他職種との連携が必要である》《社会復帰のための条件を知る》が含まれる.

《偏見がある現状を知る》には, 「精神障害者はまだ世間で偏見があり, なかなか地域の人達と付き合っていくことができない」という現状を述べた内容が含まれる.

《基盤整備が必要である》には, 「社会復帰を支援していく施設はまだまだ少ないことがわかった. 今後, 精神障害者の社会復帰支援の施設をつくり, 社会復帰のための基盤づくりが重要だと学んだ」という施設不足の現状と施設増加の必要性を学んでいる. 《他施設・他職種との連携が必要である》には, 「精神障害を持つ人々には, 様々な施設や病院, 仕事場が連携をして支えていく必要がある」という連携の必要性が含まれる. 《社会復帰のための条件を知る》には, 「自己管理できること, 自主性をもてることが社会に出て行く条件のように感じた」という社会に出るために必要なことを学んでいる.

## 2. B施設の学び

### 1) カテゴリー1【通所者の力の気づき】

【通所者の力の気づき】には, 《自己決定能力が高い》《問題解決能力がある》《対人関係能力が高い》《助け合っていて守ってもらう存在ではない》が含まれる.

《自己決定能力が高い》には, 「活動内容(ミーティングや作業の様子)を見学して, 全てのことに利用者さんが自分達の意志で行動していると感じた」という自主的に行動している内容が含まれる. 《問題解決能力がある》には, 「症状が出たり不安や戸惑いであってもそれを受け止め対処できたり, 相談できたりする」という対処能力があることに気づいている. 《対人関係能力が高い》には, 「一緒に作業や食事をしたり行事や旅行に出かける仲間として, 心配しあったり笑いあったりしていた」といった相手を気遣うことができることを捉えている. 《助け合っていて守ってもらう存在ではない》には,

「スタッフが作業に参加しなくても、役割分担をし、できる者ができない者に積極的に指導をして作業全体がまわっていく。精神障害者は『守ってもら』存在ではないことを感じた」という力のある存在であると捉えた内容が含まれる。

#### 2) カテゴリー2【精神障害者の特徴の理解】

【精神障害者の特徴の理解】には、《生活障害を抱えている》が含まれる。

《生活障害を抱えている》には、「精神障害者が地域で暮らす困難性は、疾患そのものにあるのではなく、長期入院により生活力が失われてしまうことによって地域へ戻るのが難しくなることがわかった」といった生活の困難さがあるという特徴を学んでいる。

#### 3) カテゴリー3【作業所の役割】

【作業所の役割】には、《生活のリズムを作る場である》《仲間の健康な部分をみて目標を持つことができる場である》《対人関係を学ぶ場である》《居場所である》《生活能力を再獲得する場である》が含まれる。

《生活のリズムを作る場である》には、「地域で生活し（作業所に）通うことで、自分の時間とメンバーと共に作業する時間とで気持ちのメリハリがつくことも大きいのではないかと思った」という孤独とつきあいのバランスから生活リズムを捉えた内容が含まれる。《仲間の健康な部分をみて目標を持つことができる場である》には、「仲間の健康な部分を見て『自分もこうなれるんだ』と思ったり『のために良くなろうがんばろう』と思える場所」という目標をみつける場という内容を含んでいる。《対人関係を学ぶ場である》には、「一緒に作業をする集団の中で、自分の役割や人への思いやりは必要なことなので、この作業所でそれらを学び体験していくということがわかった」という内容を含んでいる。《居場所である》には、「自分と同じ様にみんなが問題や不安を持っているので、ありのままの自分で過ごせる場であり、居心地がよいから自らの意思で作業所に通うのだとわかった」というありのままの自分で過ごせる場と捉えている。《生活能力を再獲得する場である》には、「私達が普段何気なくやってきた体験が、入院生活によってできなくなっていたということ、それを今獲得しようとしていることを改めて思い知った」という内容が含まれる。

#### 4) カテゴリー4【スタッフの援助の姿勢】

【スタッフの援助の姿勢】には、《自主性を尊重する》《健康な部分を伸ばすよう関わる》《客観的な判断が必要である》《共に行動する》《対等な関係である》《自己洞察が重要である》が含まれる。

《自主性を尊重する》には、「病院では自己決定する機会が少ないので、作業所では自己決定する機会を増やし、自主性を伸ばすように関わっていることがわかった」という内容が含まれる。《健康な部分を伸ばすよう関わる》には、「彼らの病気や障害にとらわれず、健康な部分を伸ばすことが大切だと学んだ」という健康面に働きかけることを学んでいる。《客観的な判断が必要である》には、「看護師として一定の距離を保ち、客観的事実に基づく関わりが大切であり、理由に基づいて判断・対応していく必要がある」という内容が含まれる。《共に行動する》には、「わからないからできないというのは当然のことで、彼らが求めていることは代わりにするのではなく、一緒にしていくことだと学んだ」という内容が含まれる。《自己洞察が重要である》には、「今回の学びを生かし自分の関わりを客観的にみる視点を大切にしていきたい」という自己洞察の重要性を学んでいる。

#### 5) カテゴリー5【回復過程を理解した援助の気づき】

【回復過程を理解した援助の気づき】には、《入院中に必要な看護に気づく》《回復には段階がある》が含まれる。

《入院中に必要な看護に気づく》には、「入院している患者に関わる時も、その人の病院内の生活ではなく一般社会で生活する時まで見通して、その調節を援助していく必要性がわかった」という先を見通した援助の必要性を学んでいる。

#### 6) カテゴリー6【社会復帰に関する現状と課題】

【社会復帰に関する現状と課題】には、《偏見がある現状を知る》《基盤整備が必要である》《支援的な環境が必要である》《社会復帰のための条件を知る》が含まれる。

《支援的な環境が必要である》には、「私達の生活も周囲の人々に支えられ、相談し合って生活できているのと同じように、精神障害者にとっても、支援的な環境は必然的なものであることがわかった」という支援環境の必要性を学んでいる。



### 3. C施設の学び

#### 1) カテゴリー1【通所者の力の気づき】

【通所者の力の気づき】には、《仕事に意欲を持っている》《対人関係能力が高い》が含まれる。

《仕事に意欲を持っている》には、「ここにいる精神障害者のみなさんは就労を目的としているため、それぞれが仕事に対する意欲、責任感を強く持ち、働くことに対する喜びを持ちながら働いていると感じた」という内容が含まれる。《対人関係能力が高い》には、「互いに声をかけて励ましたり、体調が悪く症状が強くなっているような時には、ワーカー（スタッフ）に報告してくれたり、とても心配したりと、互いに思いやる気持ちも感じられた」といったメンバー相互の思いやりを捉えていた。

#### 2) カテゴリー2【福祉工場の位置づけと役割】

【福祉工場の位置づけと役割】には、《福祉工場の位置づけを知る》《病気のことも考えて対応している》が含まれる。

《福祉工場の位置づけを知る》には、「実習に行くまで福祉工場は授業で学んだ作業所、授産施設の延長上にあると思っていたが、思った以上に仕事という感じで社会に近い部分にあるとわかった」という位置づけを学んでいる。《病気のことも考えて対応している》には、「調子が悪い日や病院に受診する日もあり、そこをフォローしていくのが福祉工場だと思った」という内容が含まれる。

#### 3) カテゴリー3【スタッフの取り組み】

【スタッフの取り組み】には、《地域への理解を得る取り組みをしている》が含まれる。

《地域への理解を得る取り組みをしている》には、「生活支援センターで写真展や作品展を行い、地域の人が入りやすいよう工夫していた」というスタッフが意図的に取り組んでいる実態を学んでいる。

#### 4) カテゴリー4【社会復帰に関する現状と課題】

【社会復帰に関する現状と課題】には、《偏見がある現状を知る》《基盤整備が必要である》《社会復帰には地域の協力が必要である》《病院の診療体制を見直す必要がある》《他施設・他職種との連携が必要である》《社会復帰のための条件を知る》が含まれる。

《社会復帰には地域の協力が必要である》には、「医療、福祉関係者がどれだけ社会復帰に力を入れても、地域の受け入れがないと、何も始まらないと感じた」という内

容が含まれる。《病院の診療体制を見直す必要がある》には、「精神障害の方は、定期的に受診しなければならないこともあり、皆出勤は困難である。こういった状況を医療関係者が把握し、社会復帰にむけ、もっと考えていかなければならない」という外来診療のあり方を見直す必要性を学んでいる。

### 4. D施設の学び

#### 1) カテゴリー1【通所者の力の気づき】

【通所者の力の気づき】には、《自己決定能力が高い》《対人関係能力が高い》《集中力がある》が含まれる。

《自己決定能力が高い》には、「片付け・準備などを自分達で把握して、積極的に行っていて、時間などをみて行動されていた」という自主的な行動ができることや、「活動に参加していない人もいた。その人その人にあった施設の利用をしていると思った」という自分で目的を決めているという内容が含まれる。《対人関係能力が高い》には、「他人を誉めたり、いい所を見つけてそれを相手に伝えることができる」という内容が含まれる。《集中力がある》には、「ずっと同じ作業でも、集中してできる能力があると気づいた」という集中力に気づいている。

#### 2) カテゴリー2【精神障害者の特徴の理解】

【精神障害者の特徴の理解】には、《ストレス耐性が低い》が含まれる。

《ストレス耐性が低い》には、「ストレスにどれだけ耐えられるのか、どれだけ問題を大きく捉えてしまうのか、そのあたりも精神障害者のデリケートな部分ではないかと思う」というストレス耐性が低い特徴を述べている。

#### 3) カテゴリー3【授産施設・地域生活支援センターの役割】

【授産施設・地域生活支援センターの役割】には、《対人関係を学ぶ場である》《仲間作りの場や居場所である》《役割を持ち責任感を育成する場である》《いろいろな作業により能力を見つける場である》が含まれる。

《対人関係を学ぶ場である》には、「施設での作業は1人ではできない作業ばかりで、職員やメンバー同士の連携が必要だと思った。その中で対人関係の築き方なども学ぶことができたと思った」という作業を通して対人関係を学ぶ内容が含まれる。《仲間作りの場や居場所である》には、「通所することで、仲間作りの場や昼間過

す場になっていることがわかった」という内容が含まれる。《役割を持ち責任感を育成する場である》には、「メンバーさん達は、毎日、日直やトイレ掃除の担当が決められていて、役割があることで、責任を持って自分の仕事をする力を伸ばしていくきっかけになっているように思います」という責任感を育成する場であることを学んでいる。《いろいろな作業により能力を見つける場である》には、「メンバーの方が、自分にあったものを見つけ、能力を伸ばしていける場だと思った」という内容が含まれる。

#### 4) カテゴリー4【スタッフの援助の姿勢と悩み】

【スタッフの援助の姿勢と悩み】には、《自主性を尊重する》《自己決定能力を伸ばすよう関わる》《援助に関するスタッフの悩みを知る》が含まれる。

《自主性を尊重する》には、「職員がやれば早いことも、メンバーさん達には、主体的に責任を持って身のまわりのことができるよう多少時間がかかっても、自分達でやってもらるようにしていた」というスタッフの関わりの工夫が含まれる。《自己決定能力を伸ばすよう関わる》には、「初めて施設に来る人は自己決定することが難しいと言われていたが、指導者さんも言われていたようにはじめは小さな自己決定から行い、また、決められたことについては尊重するといった関わりをすることで、その人の自己決定能力も向上すると思った」という援助の姿勢を学んでいる。《援助に関するスタッフの悩みを知る》には、「様々な活動があり、1つのことを継続して行うことが難しく、スタッフの不足などの問題が生じてくる」「生活支援になかなか取り組めない現状にある」というスタッフの援助に対する悩みを共に考えている。

#### 5) カテゴリー5【回復過程を理解した援助の気づき】

【回復過程を理解した援助の気づき】には、《入院中に必要な看護に気づく》《回復には段階がある》が含まれる。

《入院中に必要な看護に気づく》には、「看護者として、患者さんの退院時に、通所授産施設・生活支援センターがあるという情報とともに、いかにセルフコントロールを行い、生活のリズムをつけていくかという情報や方法を伝えていく必要があると考えた」という入院中に必要な看護を述べている。《回復には段階がある》には、「病棟の患者さんは、対人関係がうまくいかない人も多いけ

れど、この人達は援助を受けながらそれを乗り越えてきたと思った」という内容が含まれる。

#### 6) カテゴリー6【社会復帰に関する現状と課題】

【社会復帰に関する現状と課題】には、《精神障害者に対する世間の現状を知る》《地域との交流が必要である》《他施設・他職種との連携が必要である》《社会復帰のための条件を知る》が含まれる。

《精神障害者に対する世間の現状を知る》には、「生活支援センターということで、もっと意欲的な人ばかりだと考えていたけれど、現実にはそう簡単でないことがよく分かった。障害を抱えて社会に出ることは私が考えていた以上に難しいと思った」という自分が思っていた以上に厳しい現状を学んでいる。《地域との交流が必要である》には、「地域の人と触れ合っていく中で社会復帰という目標を達成することが大事なので、地域住民との交流に重きを置いた活動が今後望まれると思った」といった課題を述べている。

## 考察

### 1. 4施設の共通する学び

4施設に共通する学びとして、通所者の力の気づき、スタッフの援助の姿勢、取り組み、悩み、施設の役割、社会復帰に関する現状と課題が抽出された。対象を援助する人という捉え方ではなく、対象の持つ力への気づきや施設の役割などは、精神障害者が地域で暮らすために保健医療福祉関係者が十分理解する必要がある。そのことは、地域基礎看護学方法9の「精神障害者の地域保健福祉対策の概要」「精神障害者の地域生活の現状と課題」で講義が行われており、学生は、学内での学びを実際に体験を通して検証しているといえよう。

通所者の力の気づきが抽出されるサブカテゴリーの中で、《自己決定能力が高い》は、ABDの3施設に認められた。これらの施設は、C施設よりも福祉的就労の傾向が強く、通所者の中には退院後間もない人も含まれる。そのため、「自分の好きな時間に行く」「自分の意志で行動している」といった通所者と入院患者の生活を比較し、どこに違いがあるかを見出していると考えられる。

また、各施設の役割が抽出されているが、ABD施設では、生活リズムを整え、対人関係を学び、孤立しやすい精神障害者の居場所であるという役割を学んでいる。

C施設では、就労能力が他施設よりも高い人達が行っている。そのため、働くことに焦点が当たってしまうが、疾病を持ちながら働くという両者のバランスの保持に重点が置かれていることを、学生は、施設の役割として短い時間で学んでいる。

これらの施設の役割を果たすスタッフの援助には、当事者の《自主性を尊重する》が、A B D施設に認められた。C施設では通所者の自立度が高く、当事者の自主性を尊重し引き出すことよりも、当事者が活躍できる場を広げていきたいという願望が高いことから《地域への理解を得る取り組みをしている》が抽出されているとも言える。また、C施設設立経過の中で、地域の理解が重要であったということも実習時のオリエンテーションに含まれていることから影響しているとも考えられる。

## 2. 施設の個別的な特徴からの学び

施設の個別的な特徴からの学びとして、回復過程を理解した援助の気づき、精神障害者の特徴の理解が抽出された。回復過程を理解した援助の気づきは、1施設からは抽出されなかった。それは、通所者の生活レベルが高く、入院患者の生活レベルとかけ離れており回復過程を連続して捉えることが困難であったと考えられる。今後、回復過程の連続性をカンファレンスなどで補う必要が示唆された。

## ．おわりに

今回、社会復帰施設実習の学びを実習施設ごとに抽出した。各施設とも大きな学びの違いはなかった。しかし、全施設での学びの共有ができるとよりよい社会復帰施設の学びとなると考える。来年度、領域別実習に生かしていきたい。

## 謝辞

本研究にあたり、協力してくださった学生、ご指導頂いた各施設のスタッフの皆様に深く感謝致します。

註1) 地域において就労が困難な在宅の精神障害者に対して、その特性に応じた作業指導、生活訓練を行う<sup>2)</sup>場である。

註2) 作業能力は有するものの、一般企業に就労できないでいる精神障害者を雇用する<sup>3)</sup>場である。

註3) 地域で生活する精神障害者の日常生活の支援、日常的な

相談への対応や地域交流などを行う<sup>4)</sup>場である。

註4) 相当程度の作業能力を有するが雇用されることが困難な精神障害者であって、将来就労を希望する者に対し、自活に必要な訓練及び指導を行う<sup>5)</sup>場である。

## 引用・参考文献

- 1) 我が国の精神保健福祉，精神保健福祉研究会，平成12年度版；厚健出版株式会社。
- 2) 内閣府編：障害者白書，平成15年度版；193，独立行政法人国立印刷局，2003。
- 3) 前掲 2)。
- 4) 前掲 2)。
- 5) 前掲 2)。
- 6) 鎌田澄子：精神障害者の社会復帰施設実習における看護学生の学び，聖母女子短期大学紀要，13；83-90，2000。
- 7) 久保木三喜子，渡辺千恵子，河合節子他：精神障害者小規模作業所の一実習の学び，旭中央病院医ほか，24(1)；19-21，2002。
- 8) 三原亜矢巳，多喜田恵子：体験に学ぶ精神科デイケア実習の意義，名古屋市立大学看護学部紀要，2；57-65，2002。

(受稿日 平成16年2月19日)